

木の目草の芽

木の目草の芽

2019年10月4日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
shizenhogo@jac.or.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

第139号

〈全国集会報告号：目次〉

- P.1 自然保護全国集会を終えて
- P.2 基調講演 1
「生物多様性と自然保護」
江村 薫
- P.7 基調講演 2
「武甲山の希少野生植物」
中村 直樹
- P.10 分科会報告
・絶滅危惧種の保全
・山の自然を守るために
できること
- P.13 フィールドスタディ報告
下野 綾子
- P.14 連載コラム
「ライチョウといつまでも」
日吉 健治

— 自然保護全国集会を終えて —

2019年自然保護全国集会（埼玉支部
主管）は「生物多様性と自然保護」をメイ
ンテーマに7月6日（土）・7日（日）の2
日間にわたり埼玉県男女共同参画推進セン
ター（さいたま市）を会場に51名の参加者
で開催されましたので、今号ではその内容
について報告します。

初日は江村薫氏と中村直樹氏による2つ
の基調講演と3つのテーマでの分科会での
討議、夜は夕食を兼ねた懇親会で参加者相
互の交流を深めました。2日目の午前中は
それぞれの分科会での報告と各支部の活動
報告、午後は北本自然観察公園（北本市）

に移動しフィールドスタディーとして自然
観察会を行い、全日程を終了しました。そ
れらの具体的な内容については次ページ以
降に詳しく報告します。

今回の開催にあたっては松本支部長以
下、埼玉支部自然保護委員会の皆様には大
変なご苦労をおかけしましたことをあらた
めて感謝します。また、来年の自然保護全
国集会の開催については現在調整作業を進
めていますので、詳細が決まり次第この紙
面でお知らせします。

自然保護委員会



写真提供 JAC 埼玉支部

《基調講演報告》 1

「生物多様性と自然保護」

埼玉昆虫談話会会長 江村 薫氏

埼玉昆虫談話会会長を務めて19年目になります。この会は1963年に発足しまして、未就学児から90歳くらいの方まで、県内外合わせて会員数は約250名です。今日は私の昆虫との関わりの中から、埼玉県のシンボルを含めて話を進めたいと思います。

埼玉県の県民手帳を開きますと、県のシンボルが書かれています。まずは勾玉マークですが、これは「さきたま」の玉です。さきたま古墳群から大量の勾玉が出ていることから県章になっています。それからシラコバト・ケヤキ・サクラソウ・ミドリシジミ・ムサシトミヨ、これら5つの生物も埼玉県のシンボルとなっております。武甲山の写真もあります。

生物多様性を考えようとするとき、生物の種類はあまりにも多すぎます。ですからこうしたシンボルをみつけて地域の環境を考えることは重要と思ひまして、昆虫のミドリシジミを埼玉県のシンボルとした経緯があります。このことについては後で詳しく述べます。シラコバトについては、かつての江戸幕府の御

猟場から逃げ出した外来生物で、それが国の天然記念物となり、さらに「県の鳥」になってしまっています。ケヤキは本来、純林はほとんどないわけですが、扱いやすいので埼玉県中に植えられています。サクラソウは荒川の氾濫原に生え、田島ヶ原という場所が国指定の特別天然記念物になっています。この場所は、周辺整備でゴルフ場などにあつたサクラソウを、田島ヶ原に集めたもので本来の自生地ではないのですが、現在はそこにたくさん生えています。ムサシトミヨは「トミヨ(富魚)」という魚の仲間です。荒川源流のような武蔵野の清流に生息していました。正式な学名がまだ付いていませんので、「トミヨ属の一種」となります。魚の分類というのは非常に複雑のようで、なかなか種名が決まっていないという状況です。

生き物を採集しながら、他の個体と異なっているものを見つたり、どのように変わっているかという方向性を調べたりすることは生物学や科学の根源的なことで、そこから様々な栽培植物や食料、さらに論理が生まれているわけです。遣伝子が多様であることが文化となつている良い例として、埼玉県シンボルのサクラソウがあります。花卉の形や開

き具合、または花柱が出ているか否かということでも細かく分類され、葉の形も様々で多くの品種があります。これは江戸時代に、庶民が荒川から変わり種を集めて確立した文化で、庶民がこうして品種を発見したり作ったりしながら保存してきた文化は、世界的にも珍しいことだと私は思っています。埼玉県農林部の「花と緑の振興センター」では、江戸時代から伝わる品種なども含めて380種以上を保存しています。ついでに紹介しますと、早春に一回だけ発生するアゲハチョウ科のギフチョウやヒメギフチョウの食草であるカンアオイ(寒葵)の仲間「別名:サイシン(細辛)又はサイシンアオイ(細辛葵)」にも文化があります。サイシンはウマノスズクサ科カンアオイ属で、カンアオイは徳川の葵の御紋ですから、やはり江戸庶民がこの仲間を集め、斑入りなども楽しんだということです。ちなみに斑入りは植物のウイルスによる病気でもよく現れます。ウイルスと葉変わりを間違えることもあつて、病気を大切にしてしまつているという部分もあるわけです。

秩父の武甲山は、頂上付近にブナ林があり色々な昆虫が生息しています。友人に武甲山のウラジャノメの写真を送ってくれと依頼し



たところ、彼は武甲山のウラジヤノメがいかに変わっていて素晴らしいかということも含めて送ってくれました。『日本産蝶類標準図鑑』によると、ウラジヤノメは北海道の利尻島と道東部全域、本州では山形県から広島県あたりにいます。北海道東部全域にはエゾエンシスという亜種、本州にはアキノイデスという亜種がいます。本州の亜種の個体の一つに埼玉県秩父市と書いてありますが、これが武甲山の個体です。武甲山のウラジヤノメは他の個体と比較して大きくて黒いというのが特徴です。なぜこの場所にだけ大きくて黒い個体群がいるのかというと、分布域の中の比較的中心に当たることが理由ではないかと私なりに思っています。昆虫では、分布域の端に行

くとよく似た変種が現れるという事例が認められます。端と端に同じような形質が出るということですので、ウラジヤノメも広島県の個体群と北海道の個体群が比較的良好似て色が薄く小型ですが、武甲山のもの黒くてはるかに大型です。このようにシンボルに注目してみると、その場所にはどんな生き物が生息しているかを調べながら色々と面白いことがわかってきます。

サクラソウは埼玉県政誕生100年の時に決まったのですが、ミドリシジミとムサシントミヨは120周年に当たる1991年にシンボルに決められました。ミドリシジミが選ばれた理由をお話ししますと、400年前の埼玉県低地部は荒川と利根川の氾濫原だったわけですので、そこには湿地を好むハンノキが生えていて、それを食草とするミドリシジミが多かったということです。また昔は田んぼの周りにもハンノキが植えられていました、刈取ったイネの乾燥に使用していました。ハンノキのある風景は埼玉県平坦部の原風景ですから、ミドリシジミをシンボルにして、原風景を守ろうということになったわけです。三国峠や十文字峠などの山岳地域にもミドリシジミは生息しています、こちらはヤマハンノ

キやミヤマハンノキを食べています。埼玉県に生息しているミドリシジミは大きいということも面白いことです。このチョウは九州に行くとき「高山蝶」になってしまおうのですが、なぜ九州では低地にいないのかと思ったら、ハンノキがないのです。九州のハンノキの分布図を見ると非常に少なく、分布する各県で絶滅危惧種になっています。そのため標高の高い場所にあるヤマハンノキに依存しているわけです。

先ほどからシンボルという言葉を使っていますが、別の言い方として選別主義という言葉があります。富山大学の鈴木邦雄先生は昆虫の研究者で、全てを平等に扱うべきという考えをお持ちです。鈴木先生は東京農業大学出身で私の先輩になりますが、ミドリシジミをシンボルとする際に埼玉県で開催された日本鱗翅学会の会合に来ていただきました。鈴木先生には選別主義の話をしていただいて、私はシンボル主義の話をしました。シンボルを選んで生物多様性を保全することが必要だというのが私の考え方です。

農村の生物多様性を考える場合、1990年代に入り、生物保全型農業用水路などの「こ」とば」が出てくるようになります。これまで

約になると遺伝子の多様性という言葉が多く出てきまして、各国の間での生き物の行き来を規制するようになり、それによって生物系の仕事が非常にやりにくくなっている一面があります。COP10で私は農水省のイベントブースにいましたが、そういった国家間の駆け引きもあり利害関係がむき出しの会議などと思いました。

第2章では「生態系サービス」という言葉も出てきます。その内容は「基盤サービス」、「供給サービス」、「文化的サービス」、「調整サービス」であると行政は説明しますが、簡単にいうと自分たちは自然から多くの恵みを受けているということを4つに区分けしているわけです。私なりに説明すると、微生物の分解によって土を作っていたり酸素を供給しているということが基盤サービス、食料や木材等を供給しているというのが供給サービス、そして豊かな感性を養ったり文化芸術に繋がったり、例えば先ほどのサクラソウなどは文化的サービスに入ると思います。それから植林の方法によって山が壊れにくくなるか、色々な虫がいることで病害虫が抑えられるといった効果が調整サービスです。

第2章「生物多様性とその危機」についても少しお話ししますと、①「人間がかかわることによる危機」という部分があり、これに関連した、身の回りで気にかかる2つの事例を説明します。その一つは、水生昆虫がいなくなった理由を農業のせいにするケースが非常に多いですが、家庭雑排水に含まれる中性洗剤の界面活性剤は呼吸に及ぼす生物影響が強いので、水生生物はそれで痛めつけられていると私は思っています。二つ目は、昆虫は光に集まってしまいますので光の影響も大きいと思っています。一方、全体的な考え方も、土地を利用する農林業は、湿地帯や山を切り開いて田んぼや畑にしますが、それはもう多様性の破壊者であり、生物多様性の論議ではなくなる考え方もあります。そこで近年、手が入らなくなった荒れた里地里山は生物多様性という立場から見たら「自然が戻ってきた」との考えも成り立ちます。しかし、美しい里地里山の環境保全には、人間が手を加えることの必要性を感じています。

第3章「埼玉県の生物多様性をとりまく状況」の中の「自然環境」の部分の最後に「外来生物」の項目があります。埼玉県で現在最も問題になっている外来生物の一つに、クビ

アカツヤカミキリというカミキリムシがいます。これは中国が原産地で、2011年に日本で初めて埼玉県深谷市で発見されました。サンケイ化学という農薬会社の職員が、たま知り合いから貰ったのがそのカミキリでした。2012年には愛知県で被害が確認されています。この種はサクラ、スモモ、モモ、ウメに被害の大きい害虫として飼育や移動を禁止する法律ができました。目に見えないウイルス病も多く侵入しております。例えば、梅輪紋ウイルスは2009年に東京の青梅市で発見されました。発生確認木から半径500mのウメを伐採する法律があり、青梅市のウメのほとんどが切られました。南北アメリカの他、ユーラシア大陸の数か国とエジプトに蔓延するこのウイルスはアブラムシが運んでおり、人為的にはサクラにも感染します。

埼玉県生物多様保全戦略の最後付近の第5章には、「各実施主体に求められる役割」の項目があり、県、市町村、企業、NPO等「団体」、個人の役割が記述されています。私たち埼玉昆虫談話会では、2008年から東京大学秩父演習林で昆虫調査を行い、近年は、小赤沢というところで月に1回の調査を

<全国集会報告>

実施しています。その一環で、変わったミドリシジミの仲間を見つけてまして、生殖器を引っ張り出して形態を調べたところ、これまで確実な記録が無かったジョウザンミドリシジミであることがわかりました。月1回の蛾の採集調査では、これまでの10年間で58種の埼玉県初記録が秩父演習林から見つかり、



さらに最近みつかった42種を合わせると、演習林ではちょうど100種が発見されています。小さな蛾をいっどこでだれが発見したという記録も書き出します。秩父演習林の職員だった方が昔、564種を標本として集めたのですが、そのうちの117種については、私たちは、秩父演習林で確認していません。その標本はどこにあるのか長い間わからなかったのですが、秩父演習林のワサビ沢展示室に保存されていることが昨年わかりました。

私たちは秩父演習林が主催する「夏休み公開昆虫講座」に協力しています。また、「昆虫館」の運営を2012年から越生町の協力を得て実施していたのですが、本年2019年春に、加須市に自前の昆虫館を作り移転しました。9月には、昆虫館に隣接する利根川河川敷で「鳴く虫観察会」を予定しています。子どもは耳が非常に良く、目も良く、さらに目の位置が地面に近いので、多くの種類の発見が楽しみです。「県の蝶・ミドリシジミを見る集い」というのも埼玉県環境部と共催で1992年から実施しています。

なお、私は個人的に久喜市立久喜東小学校で子供たちと年に数回、校庭内で昆虫採集を

行なっています。雨の日には室内でチョウの鱗粉転写をしました。鱗粉転写は腐りませんし虫にも食われません。長野県の青木村に信州昆虫資料館がありまして、そこに白川英樹先生が子供の頃に作った鱗粉転写の標本が大量に展示してあり素晴らしいです。この先生も昆虫少年だったのです。ノーベル賞の受賞が決まったその日、記者から出た「子どもの教育」についての質問では、「昆虫採集をしているのが良い」と話されたことが印象的でした。

子どもは昆虫を捕まえるのが自然体で、カゴに入れて好きなように触れることから科学は生まれるのです。子どもは虫を捕ったりカエルを捕まえたりするのが当たり前ですが、それが今は法律違反だとか条例違反になってしまおうというのはどうかと思うわけです。ですから規制は種指定ではなくて地域指定にする方が良いと思っています。昆虫の多様性保護のための重要地域を挙げてその地域を守ろうという運動を日本昆虫学会自然保護委員会としてはしており、埼玉県内での候補地を挙げた経緯があります。

《基調講演報告》 2

「武甲山の希少野生植物」

日本山岳会 埼玉支部自然保護委員

中村 直樹氏

埼玉県は「彩の国」という愛称を持ちシンボルの県木はケヤキ（ニレ科、槲）、県花はサクラソウ（サクラソウ科）で絶滅危惧ⅠA類、特別天然記念物。両植物は埼玉の中央部を流れる荒川に深い関係がある。ケヤキは段丘崖（ハケ）、サクラソウは低湿地に自生する。東京が巨大化するなかで河川敷は公園、ゴルフ場などに開発されて、まさに危篤状態である。

武甲山（1304m）の山名の由来は日本武尊が自らの甲をこの山の岩室に奉納したという伝説が元禄時代から定着している。古代から神の山として崇められ、山岳信仰や観音信仰、妙見信仰と結びつき信仰の山となっており、豊作を祈念する秩父神社の秩父夜祭は、この山を舞台に現在も繰り広げられている。武甲山は信仰と生物多様性の宝庫で、秩父の生活と文化に大きな影響をもたらしている。

武甲山の北側斜面は石灰岩で開発が保護かをめぐり秩父市議会での記録が残っている。

1982年6月、秩父私有林の売却をめぐり、秩父市議会で攻防が続いていた。当時の市長（故人）が答弁した。「自然保護と云って、霞食って仙人のように生きていくわけにはいかない、売却は地域経済、地域産業育成のためやむを得ない。」この理論は発展途上国の開発理論と共通性があり生物多様性を喪失させる要因となっている。

これまで環境問題や自然保護運動では「保全」「保護」が混在するも、どちらかと言えば「保護」に軸を置く考え方であった。近頃生物多様性をめぐり保護という目的であれば自然を利用できなくなる。181カ国からなる世界最大の自然保護機関である国際自然保護連合(IUCN)は1985年からInternational union for Conservation of Nature and Natural Resources に改めている。つまり「自然保護(Protection of nature)から「自然資源の保全」に名称を変更している。

「武甲山の希少野生植物」はAPG分類を使用している。

※ APG: Angiosperm Phylogeny Group

被子植物系統発生グループの略

レッドデータカテゴリーについては、より地域に密着した保全活動を推進するため埼玉県絶滅危惧植物種調査団編を使用している。

EX: 絶滅 EN: 絶滅危惧ⅠB類

EW: 野生絶滅 VU: 絶滅危惧Ⅱ類

CR: 絶滅危惧ⅠA類 NT: 準絶滅危惧

カタクリ(別名: 堅香子)は発芽して本葉を2枚出してから7~9年目で開花する多年草。繁殖様式は、自家不和合性で自家受粉による種子の形成はほとんどない。種子散布は朔果による自発散布で地上に落ちて、種子の端についているアリの好物で糖や脂肪酸を含むエライオソームがついていて運ばせる。

また、カタクリは氷河時代の生き残りでもある。日本列島の温暖化で一部は北海道や東北地方へ、別の群落は冷涼な山岳地帯へ、更に丘陵地では北側斜面で生存し美しい花を咲かせている。



カタクリ (コリ科) 絶滅危惧Ⅱ類

<全国集会報告>

アケボノスミレ

スミレはスミレ

科スミレ属の植物の総称である。狭

義には *Viola*

mandshurica 種の

和名でもある。名

前の由来は大工さ

んの使う「墨入

れ」で、距がその

形に似ていること

による。原産地は南アメリカ・アンデスで現

在北半球の温暖帯に分布している。世界に4

00種、日本に60種、武甲山の希少種はシ

コクスミレ(絶滅危惧Ⅱ類) エゾノタチツボ

スミレ(絶滅危惧Ⅱ類)、アケボノスミレ

(準絶滅危惧種)である。多年草で、繁殖様

式は開放花(結実率は30%)閉鎖花(結実

率はほぼ100%)、匍匐茎による栄養繁殖

等があり多様である。種子散布は朔果での散

布距離が40cm、アリによる散布距離1m

の範囲で移動する。

ベニバナヤマシヤクヤク(ボタン科)

絶滅危惧ⅠA類。春も終わりに近づいたころ、

夏緑温帯の広葉樹林、殊に石灰岩を好む傾向



がある多年草花は淡紅色あるいはときに白色

もある。ヤマシヤクヤクによく似ているが、

花弁が淡紅色で、雌蕊の柱頭がやや長く曲が

ることとで区別する。絶滅の危険性は極めて高

く、シカなど動物の食害と、大型の花なので

園芸採取の危険性も高い。

ヤマシヤクヤク 山芍薬(ボタン科)絶滅危

惧Ⅱ類、日本の固有植物、学名は *Paonia*

japonica。芍薬の「芍」は灼熱の「灼」と旁が

同じで、「あきらかな、輝くような」の意、芍

薬の「輝くよう

な」花を表わし、

本当に美しい。花

の咲いている時

期が極めて短い

ので、開いたかと

思うとすぐ散つ

てしまう。なお、

学名のラテン語

paonia は英語の

pioneer で開拓

者、先駆者である。

ムラサキ(ムラサキ科)野生絶滅、旧版植物

誌(1962年)の記録以来、自生種を確認

していない。丘の乾いた石灰岩質で昼夜の温



度差が大きい草地に生える多年草。ムラサキ

は紅花、藍、と共に日本三大色素の一つで、

使用部位は根を用いシコン(紫根)という。

古来より高貴な色とされ聖徳太子の冠位十二

階も、最上位の大徳・小徳の冠が紫とされて

いた。紫は夏の季語で万葉集に十七首あり、

古くから愛されていたことがうかがわれる。

このような日本文化を象徴する至宝植物を、

武甲山から絶滅させたことは、地域経済、地

元産業育成のためにはやむをえなかったのか

現在、武甲山でセメント材料の石灰岩を採掘

している秩父太平洋セメント三輪鉱業所、前

身の秩父セメント三輪鉱山でムラサキの人工

増殖に取り組み、外気にはさらされるが雨に

は当たらないようにして保全に努めていると

いう。

最後に植生概要として武甲山は、好石灰岩

植物と地質構造線の太平洋側の植物、北方系

要素を加味した植物を実感している。武甲山

は太古から固有の野生植物を育み秩父の文化

の原点となってきた。しかし野生植物の5種

に1種は絶滅の危機にあり種の多様性、遺伝

子多様性の重要性を改めて感じる次第である。

<全国集会報告>

武甲山の3希少植物、多くの観光資料に使用されているが日常の登山活動中に自生を確認することはできない。



チチブイワザクラ



ブコウマメザクラ



ミヤマスカシユリ

和名	チチブイワザクラ	ブコウマメザクラ	ミヤマスカシユリ
科名	サクラソウ科	バラ科	ユリ科
特徴	茎と葉に紫色の毛が密生	葉は大型で丸み、葉柄に毛無し	岩に垂れ下がる
カテゴリー	絶滅危惧 I A 類	絶滅危惧 I A 類	絶滅危惧 I A 類
日本の固有植物	●	●	●
国指定の天然記念物	●	●	●

●は日本固有植物、国指定の天然記念物

春の妖精 **Spring ephemeral** と呼ばれる植物は、残雪の残る春浅い落葉広葉樹林（ブナ、ミズナラ、カエデ類）の林床で開花する。木々の梢も冷たい風に吹かれてまだ芽を硬く閉ざしているような冬枯れの中で、芽を出し、あっという間に成長して花を咲かせ春の到来を告げる。

	フクジュソウ	セツブンソウ	アズマイチゲ	カタクリ
科名	キンポウゲ科	キンポウゲ科	キンポウゲ科	ユリ科
好石灰岩植物	●	●	●	●
日本の固有植物		●		
カテゴリー	NT	NT	NT	NT
花粉媒介昆虫	ハナアブ	日本ミツバチ	不明	ミヤマセセリ ギフチョウ
その他	花の中心部は外 気より 5~10° C 高い			

《分科会報告》

◆絶滅危惧種の保全 殊にAPG分類

担当：中村 直樹
報告：石川 慎吾

最初に、埼玉支部自然保護委員会の中村直樹氏から、希少野生植物の保全活動に不可欠なAPG分類体系について話題提供を受けた。以下に中村氏の説明の概要をまとめる。

APG (Angiosperm Phylogeny Group) 分類体系は、DNA の塩基配列に基づいて構築されたものであり、進化の過程をより忠実に反映した体系で、いわゆる「他人の空似」を避けることができる。

APG分類体系は、従来から広く用いられてきたクロンキスト分類体系にとって代わる体系として、今後、日本でも標準の植物分類体系として用いられるようになる。したがって、日本山岳会としても公式の文書では、APG分類体系に基づいた記述を行ったほうが良いであろう。

APG分類体系では、双子葉類と単子葉類の大別ができなくなる、合弁花類と離弁花類を分けないなど、今までなじんできた植物の大きな分類方法が変更された。それだけでなく、

所属が変わった科や馴染みのあった科名が消えてしまった、というものも多い。

例えば、ムラサキシキブは、クロンキスト分類体系ではクマツヅラ科であったが、APG分類体系ではシソ科に変更になった。同様に、ヨツバシオガマはゴマノハグサ科からハマウツボ科に、アオキは、ミズキ科からアオキ科に変更になった。

名称が消えてしまった科としては、スギ科やカエデ科などがあり、それぞれヒノキ科、ムクロジ科に統合された。

従来から多様な種が含まれていたユリ科は大きく分割された。例えば、スズランはクサスギカズラ科に、ゼンテイカ（ニッコウキスゲ）はワスレグサ科に、エンレイソウはシュロソウ科に含められた。

以上のような説明を受けて、多くの参加者は一様に戸惑いを隠せなかった。植物の分類を専門としていない者が、ただちにこのような分類体系の大きな変更についていくのは不可能に近いし、今まで使用していた図鑑を時代遅れのものとして捨てなくてはいけないのだろうか？幸い、中村氏からAPG分類体系をインターネットで検索できるサイト(東北大学の米倉浩司博士がまとめた [Ylist](http://Ylist.info);

<http://Ylist.info>)を紹介していただいた。多くの種の和名はそのまま従来のものが使用されているので、私は、今まで使用していた図鑑で和名を調べ、Ylistでその種の科名を調べることが現実的な対応策であると考えている。

APG分類体系の説明を受けた後、環境省や各県で作成されているレッドリストの検索方法、希少種の減少の要因などの説明を受けた。天覧山と多峯主山の植物の美しい植物の写真を見せていただき、日本山岳会としての取り組みとして希少野生植物の保全に話が進んだ。最後に中村氏から、日本山岳会の会員には高齢者が多いのでハードな山登りができなくなった会員の活動として、希少野生動植物の保全を進めていくのはどうだろうか、という提案があった。対象とする山や地域を決めて、希少種の位置情報や写真を撮影して、会員でデータを共有し、保全につなげようということである。保全のための対策や活動内容については、各支部単位で、それぞれの地域の実情を勘案しながら決めていく必要があるであろう。

◆山の自然を守るためにできること

担当：山田 和人
報告：小林 敏博

本部自然保護委員による標記テーマに関するメモを配布し、事前に読んでいただいたうえで、山田委員からの「自分は山に対してこういう思いがあるから自然保護に行き着くということでは何か発言を」との呼びかけに参加者からそれぞれの立場からの意見が出された。

・本部委員会で2008年に環境調査を、全会員を対象に実施し1900人を超える会員から回答があった。例えば、オーバーユースの問題と入山規制について肯定的回答は75%程度。今でも一つの指針として調査結果をもとに活動できるのではないか。

・調査はもうよいのではないか。実際にやらなければ。例えば、鳥取の大山は崩れて、皆が下から石を持って登っている。そういうのをやりたいなど。その地方地方にはそういう問題があり、山岳会としては実際にどういうことができるか、何をやるかを考えるべきだ。大山の場合は自然を守る一つの方法だ。各支部で同様なことをやるのがよい。

・問題はいろいろあるが、じゃあどうするのか

ということに力がそそげない。支部では活動している。例えば、多摩支部では雲取の石尾根の整備をしている。ほかの支部でも聞いている。地域に根差した活動がキーポイントだ。

・山岳会全体でやるのではなく、各支部がどう考えるか、どう捉えるのかだ。それを基に動きだすことが大事だ。

・全国集会で学びたいと考え参加している。岐阜での集会では伊吹山の外来植物を実際に見て学び意識が変わった。それを仲間に伝える。その仲間がさらに広く伝える。それも大事なアクションだ。昨年の石川では高山植物園の職員から高山植物を守るのがいかに大変かを学んだ。体を通して学ぶという全国集会のスタイルを私は好きだ。その都度地元に戻り皆にフィードバックし続ける、こういうことも必要だ。

・33支部あっても実際に動ける人間はわずかだ。うち（群馬）も動ける人は半分以下。強いのは岳連、労山。求めるものは同じなので、今3団体は連絡協議会を作り一緒に動いている。今の悩みは自治体との交渉だ。3年前に県から県境稜線トレイル100キロを観光として何とかならないかとの話が協議会にあり、やろうということになり11キロは独自に開いた。一般登山者には避難小屋が必要で、予算をようやく確保し、

携帯トイレブースの設置もお願いしていたが、図面ではそれがなかった。さらに設計のやり直しになった。

・東京多摩支部では委員会を立ち上げたが、何もできない。東京都レンジャーの石尾根での道の整備や三つ峠のアツモリソウ保護活動は、都に相談したり、三つ峠山荘の主人から支部員が話を聞いてからやり始めるようになった。東京都の指定保全地域のうち2地域は保全活動が入っておらず、都から話を聞き見学をしたが、そういう手順をとらないと活動ができないのが実情。高尾の森づくりで監視カメラにシカがよく映るようになり、八王子市に対応を要請しても市は何もしない。だからメディアに訴えようと思っている。

・東海支部でも森づくりをやり、野生動物の調査も行い、チェーンソーの音でシカが来ない。山が明るくなったとの感謝をハイカーから言われたり、民有林所有者から手入れの依頼もくるようになった。まず森づくりをしたらどうか。

・関西支部でも国有林を借りて森づくりを行っているが、シカの被害は相当進んでいて国有林と話をして罾を仕掛けた。国・自治体と話をすれば何とかなるのではないか。森づくりエリアに東海自然歩道が通っているので、その保全も

<全国集会報告>

行っている。展望が悪くなったところの木の伐採もしている。いずれもしかるべきところと言えは対応できる。

・宮城では県の自然保護課が栗駒山の湿地を保護するため笹刈り払ってほしいとの依頼が各山岳団体にあった。参加者70〜80人が湿原を踏み荒らすので他の植物はどうなってしまうのかとの危惧から自然保護課に問い合わせても回答がいまだにこないで、去年から参加を中止している。

・六甲で笹刈りをやった。刈るだけでなく、行政に反映するために博物館の研究員に調査を自前で依頼した。行政にだけ頼んでも難しいので、行政をリードするようにやったほうがよい。

・東海支部のようにできることをやるのが一番よい。県に頼むと難しい。東海支部がやっていることは、我々もできるのではないか。独自に、支部だけでできることをやるのがよい。

・埼玉はシカ問題をいろいろとやっている。現状を役所に報告すれば役所を動かすことができるかもしれない。もっと科学的にやろうということにもなった。モニターをつくることがいいのではないか。モニターしたものからやるべきことが出てくる。日本山岳会は岳連と違い、全国にわたっている。やれることはあるはずだ。

・四国支部では、支部会報に全国集会の報告を載せているだけなので、NPOに入って自然保護活動をしている。天神丸のオリックスの風力発電について、四国の山岳4団体が一緒に取り組み、県民の皆に紹介、情報提供を進めている。現在、日本山岳会は参加していないので、自身自身が声を出して取り組みをするようにしたい。

また、今は親子登山教室をやっている。小さな頃から教えないと、ということでも実施している。剣山に一泊し、ゴミ袋を配り拾って、体験しながらマナーを覚えてもらっている。

・それぞれ地域の特性があるので、それに合った活動をすればよい。それにより周りの人を動かすことができる。ゴミを拾うこと自体、山ならばできるのではなく、気持ちの持ちようだ。シカの問題、実態を知らない人に話すために山に入ることは意味がある。続けることが重要だ。本部のあり方は、このような話を聞いてまとめて紹介する、つながりをつけることが大切。各支部が活動しやすいようなこととする。

・基本は、個人でどう動けるか動くかだろう。そういう人が5人、10人集まれば山岳会として意味がある。また、山行の同行者に携帯トイレの話を出す、語り掛けられる人に話すことが大切。個人で何ができるか、その積み重ねが必要。

・石川支部で親子登山やっているが、山の話や座学で学んでもらって、その後白山に登る。携帯トイレをプレゼントして、用を足すことを自宅でやってもらい、感触を確かめようと思っている。そういうところから知らせようと思う。

・一番の問題はオーバークースだが、利権がありなかなか手をだせない。各支部はやり易いやり方で、本部は支部の情報を各支部に流すなどをすればよい。一番やり易いのはゴミ拾い。埼玉支部も岳連もやっている。もし地域に保全すべきところがあれば、低いところはいろいろの団体がやっており、山岳会は高いところでやればよい。地道なので成果を出すのは難しいが支部はまずやり易いところからやればよい。

・本部の仕事は支部で自信を持ってやっていることを皆に伝えること。山にインパクトを与えているので携帯トイレを持参し使っていることを周りに話そうと思う。各支部の活動とは別に33支部をまとめて山岳会全体でうねりとしてできるものや発信できるものがあれば、提案してほしい。

※お断り…分科会1「生物多様性と自然保護の関わり」は都合により次号に掲載します。

《フライルドスタディ報告》

植物観察会 北本自然観察公園

報告 下野 綾子

北本自然観察公園は、里地里山の自然環境を残しながら、野生の生物がくらしやすいよう、また来園者が自然に親しめるように整えられた公園で、32.9ヘクタールもの広さがあり、公園内には埼玉県自然学習センターがあり、公園のイベントや生きものの情報が解説されている。また公園内の散策路ぞいにも様々な解説パネルがあり、生き物のことを学びながら歩くことができる。荒川に隣接していることもあり園内には小川が流れ、湿地も多い。ヘイケボタルの生育地としても有名なようだが、ちようどホタルの発生時期だったので、暗くなるまでいられたら観察できただろう。

湿地は世界でも日本でも著しく減少した生態系とされている。国土地理院によると、日本に存在する湿地は約八二二平方キロで、明治・大正時代に存在した湿地の四〇%足らずだという（調査のとりまとめは二〇〇〇年）。なかでも、埼玉県の減少率は九〇%を超えており、湿地性生物の本来あった生育地の大部

分が失われたことになる。従って、自然の湿地が残されている北本公園は、湿地性生物のレフュージアともなる貴重な場所である。

また園内にはススキ草原も維持されている。温暖・湿潤な日本では、人が手を加えなければ森林へと遷移する。従って平地の草原の多くが放牧や刈り取りなどの人間活動によって維持されてきた半自然草原である。かつて半自然草原は放牧・カヤ場・燃料や肥料として利用され、明治時代後半には国土の一〇%以上を占めていたとされている。しかし、現在、利用価値が低下したことで、管理放棄、都市開発、遷移等が進み、現在では一〇分の一下にまで減少した。湿地と同様、大幅に減少した生態系であり、明るい草原を好む動植物の多くも存続が危ぶまれている。秋の七草であるキキョウ・オミナエシ・フジバカマなどがその例である。

湿地は人間による過度な利用（開発）が減少の原因であるが、半自然草原は人間の適度な利用（持続可能な利用）が喪失したことによって減少しているのが対称的だ。この公園でも多くのボランティアが草刈などに参加して、草原を維持しているとのことだ。ずっと

人の手による管理が求められる草原の維持は、その場所に愛着ある人の関わりが欠かせない。公園では子供たちを対象にした様々なイベントが開催されている。こうしたイベントを通して自然に愛着を持った後継者が羽ばたいていってほしいと思う。



連載コラム

「ライチョウといつまでも」

自然保護委員 日吉 健治

⑤ニホンライチョウの一年その2②

今号では先号に引き続き雛誕生から厳冬期の暮らしを追っていきます。

まだ梅雨の最中である7月上旬になると、ライチョウの卵は孵化し雛が誕生します。

メスは全卵産み終えた後に抱卵するために全ての卵の孵化は1日のうちに完了します。

孵化後に子育てをするのは、メスのみでオスは子育てに一切関わらず、夏の間その姿を見せなくなってしまう。

雛誕生後、メスはお腹の下で12時間程温めて雛の羽毛を乾かした後、雛を連れて巣を離れます。この後巣には二度と戻りません。

ここからメスの気を抜くことの出来ない子育てが始まります。

雛は自分で体温調整が出来るようになるまで1か月ほどかかるため、梅雨の長雨による低温状態が続くと雛の生存率が下がります。

またオコシヨ等による雛の捕食もこの時期に最も多くなります。

このため、ライチョウの雛は孵化してから

1か月後の生存率が低く、8月中旬には半分以下になってしまいます。

メスは翼の下に雛を集めて温める「抱雛」や周囲の警戒行動などにより、雛を1か月間守り切るとまずは最も危険な時期を脱します。

この後メスは、警戒行動を続けながら雛を連れて、子育てを9月末くらいまで続けます。

10月になると雛は親と同じ位の大きさまで成長し、若鳥となって親離れしていきます。

雛が親離れした10、11月はライチョウがオス、メス、若鳥を含めた、秋群れと呼ばれる最も大きな群れをつくる時期です。

そして雪が高山を覆う頃には冬羽に姿を変えて冬の生活へと移行してゆきますが、雪にすっかり覆われてしまった12月以降ライチョウたちは高山帯から姿を消してしまいます。信州大学・羽田健三教授らに解明されたのはここまでで、厳冬期のライチョウがどこにいるのかは長らくわかっていませんでしたが、その後の同大・中村浩志教授(当時)らの乗鞍岳での調査により明らかになってきました。

その調査結果により、厳冬期にはライチョウたちが森林限界付近まで下りてきていることが確認されました。

寒冷な気候に適応するライチョウですが、

全てが雪に覆われてしまうこの時期は高山域では生活できません。ハイマツを含めて一切の植物が雪に埋もれてしまい、餌がなくなってしまうため、一方、森林限界付近ではダケカンバの枝先などが雪から飛び出しているためそれを餌にすることが出来ます。

この森林限界付近まで下りてきたライチョウたちはオスはオス同士、メスはメス同士で群れを作って暮らしています。※

そしてダケカンバの冬芽などを食べながら再び雪解けがはじまる翌3月まで雪山の中でひっそりと過ごしているのです。

(参考)ライチョウを絶滅から守る 中村浩志、小林篤(2018)

※白馬乗鞍などではオスメスで群れを形成

◎「ライチョウ国」の紹介

室堂平にある富山県立山センター・立山自然保護センターでは室堂平一帯を「ライチョウ国」とし、館内展示と野外の自然を一体とするエコミュージアムを公開しています。

立山登山の折り、是非お立ち寄り下さい。

<http://tateyama-shizenhogo-c.raicho->

minamori.net/

<ライチョウの絵葉書を作成しました>

私たちが山に持ち込むゴミを目当てにやってくるカラスやキツネが、ライチョウの脅威となることを伝える目的で絵葉書（4枚1組）を作成し、上高地や妙高で配布しました。



POSTCARD

ライチョウが 1700 羽に減りました。
山に来た人がゴミを残すと、カラスやキツネのエサになります。これを
目当てに来たカラスやキツネはライチョウのヒナも食べるのです。

The rock ptarmigan is on the verge of extinction.
Save the rock ptarmigan from extinction. Crows and foxes, attracted
by garbage and food left over in mountains by hikers and climbers,
come to attack and prey rock ptarmigan chicks.

公益社団法人日本山岳会 自然保護委員会
Nature Conservation Committee of The Japanese Alpine Club



写真は中村浩志先生（信州大学名誉教授）
と古川研吾氏（JAC 理事）から提供いただきました。

上高地では、夏休みのライチョウ張り子作り教室（川口委員担当）の参加者へ配布した他に、源原重行氏や埴崎滋委員など、現地でもインタープリター活動をされている山の自然学研究会メンバーの方々も配布にご協力くださいました。

美しく表情豊かなライチョウの写真は、大人だけでなく子供たちにも大変好評でした。

ご希望の方は、電話 047-463-8721（川口）までご連絡ください。

◇自然保護委員会の活動記録◇

〔七月度〕

報告・連絡事項

- ① ライチヨウ絵葉書の印刷について
夏毛2点、冬毛2点、計4枚1組で千組作成。
上高地、妙高地で配布、事務局にも置く予定。
販売について提案があったが、今後検討する。
- ② 第10回日本山岳会森づくり連絡協議会
参加希望者は谷内、川口、近藤（初日のみ）、
井藤、和田、小林。
- ③ 「木の目草の芽」について
*139号（全国集会報告号）は原稿締め切
り8月末日、9月発行予定。

*編集体制を見直し、編集内容について多くの委員が関われるようにしたい。ブックレビューや支部活動、自然保護の基礎知識などを載せたらどうか。印刷の外注化も具体化する。

◇自然保護全国集会

埼玉県男女共同参画推進センターで

7月6日・7日に開催

協議事項

- ① 委員会開催日について
9月以降は第3金曜日開催に決定。報告等は
メールリングリストを活用し、委員会ではその
取りまとめと協議事項を中心に行う。
- ② 委員会名簿とメールリングリストについて
*事務局作成の校正を確認、修正を依頼する。

*桑野あさひ委員は委員ではないがメール
リングリストにのみ参加する。

- ③ 年次晩餐会の展示について
「自然保護活動の歴史」に関する総務委員会の
提案について協議。
*歴史と併せて現在の各支部の多様な活動を紹
介するのがよいのではないか。
*対応は可能だが、8月19日（月）の総務委員
会で協議結果について回答し、確認を取ること
とする。
- ④ 上高地での委員会開催について
10月12日（土）に山研で実施する方向で参加
者を確認する。
- ⑤ 自然保護全国集会についての意見交換
来年は関西支部で実施することが決まったので、
その運営に反映したい。

〔八月度〕

報告・連絡事項

- ① ライチヨウ絵葉書の印刷と配布状況
さらに千組増刷する。室堂ターミナルなどに置
くなど配布する時間はまだある。
- ② 各支部で委員長が代わり、自然保護委員長
も代わった可能性があるので異動を確認する。
- ③ 現在、自然保護委員会の窓口が川口委員の
メールアドレスになっているため委員会のメー
ルアドレスを新設する。自然保護委員会の口座
（郵貯）も作る。

協議事項

- ① 年次晩餐会での展示について
委員会で議論した展示の方向性について総務委
員会で説明、基本的に了承される。
*9月に支部への声掛け、10月に資料集め、11
月に統一的なパネル作りをする。
- ② 上高地での委員会開催について
10月12日（泊）に自由参加で開催。120周
年事業で自然保護委員会が全国で取り組む活動
「木の目草の芽」、全国集会や支部の活性化など
に関するアイデアを出してもらいたい。

③ 山岳団体自然環境連絡会議シンポジウムの
テーマ案について
シンポジウムに関するテーマ案を各団体が出す
ことになっており、案を9月13日までに委員長
に出してほしい。

《編集後記》北本自然観察公園が日曜の朝にテ

レビ中継され、葉裏にしがみつくとオトリノフ
ンダマシ（クモ）を紹介していました。小さな
クモは鳥のフンに擬したまま丸まって動かない
うえに、台風の吹き返して葉がひどく揺れて視
覚的に捉えがたい映像となりました。それ
でも決してクモを無理に葉から引き離そうとは
せず、あの手この手で彼らの愉快な暮らしぶり
を伝えようとする職員の努力が画面を通して感
じられ、温かな気持ちになりました。 元川